
僕は夢を見る。とても素敵な夢だ。

L i t a l y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は夢を見る。とても素敵な夢だ。

【Nコード】

N0507B

【作者名】

L i t t a l y

【あらすじ】

死んだインディアンがいいインディアンだけだったとしても、それでも僕はやっぱり生き延びなければならなかった。

ガールフレンドが言う。

ただのガールフレンドじゃない。
とても親しいガールフレンドだ。

ねえ、のどが渴いた。

僕もその瞬間そう思ってたから、本当にそう思ってたから、
彼女がそのタイミングでそう言った事が僕には奇跡のように思えた。

ねえ、オレンジジュースがいい。

僕はうなずく。

自動販売機にお金を入れようとするんだけど、

お金をいれる穴がとても高いところにあるから手が届かない。

多分僕の身長の倍くらいの高さだ。

この自動販売機を作った人は

なぜこんな高いところにお金を入れる穴を作ったんだろう。

僕は必死にジャンプする。

そしてその馬鹿みたいに高いところにある穴に右手をかけ、
左手でお金をねじ込む。

260円。

オレンジジュースの値段が260円だったからだ。

オレンジジュースのボタンはさらに高いところにある。

僕は背が高い方なだけとその僕の2倍くらいあるんだから、実際のところその自動販売機は4m近くあることになる。

そしてその最上段にオレンジジュースのボタンがある。

僕は必死により登り、ボタンを押す。

僕は間違えて隣にあったグレープフルーツジュースのボタンを押してしまう。

彼女の方をみる。

彼女は微笑んでいる。

僕は自動販売機から跳び降りる。

グレープフルーツジュースはいらないや、と彼女がおかしそうに笑いながら言う。

そうだよ、え、といって僕はグレープフルーツジュースのプルリングをはずす。

望まれなかったグレープフルーツジュースの味は、

必要以上の苦味を主張している。

傲慢なほどに。

彼女はなぜかオレンジジュースを手を持っている。

僕は、ああ、よかった、と思う。

でも次の瞬間とても悲しい気持ちになる。

ガールフレンドが言う。

ねえ、愛してるのよ。

僕が言う。

うん、僕も愛してる。

彼女が言う。

ねえ、本当に愛してるのよ。

僕が言う。

僕だって本当に愛してる。

あなた何も分かってないわ。

僕は何かを言うべきなんだろうと思う。
けれど、その言うべき言葉をうまく引っ張り出すことが出来ない。

セミがないている。

彼らは世界の終わりを嘆いてるんだ。

と誰かが言った。

僕にはとてもそうは思えない。

彼らは嘆いているのではなく、祈っているのではなく、
そう、ただ鳴いているのだ。

ものごとに必要以上の意味を与えすぎるのは
危険な事だし、間違った事だ。

僕は「誰か」にそう言う。

「誰か」がいう。

ねえ愛してるのよ。

ねえ、本当よ。

僕はとても切ないきもちになる。

世界の中心にだけ青い空は残されていて、

それ以外の全ての空は夕焼けの色に染まってしまっている。

夜の闇がそこに一瞬だけ現れるけれど、

その度に誰かが折り紙のように折りたたんでしまってから夜は夜として成立しない。

電車が向こう側からやってくる。

そしてあっち側へ去っていく。

踏み切りはまだ降りたままだ。
サイレンが鳴っている。
誰の為でもないサイレンだ。

僕は彼女の手を取る。

今がきつとキスをするチャンスだ。

彼女が僕を見る。

彼女にはもちろん表情が無い。

だって彼女は砂で出来ているから。

僕はその砂で出来た丸い物体の真ん中あたりに口付けをする。
不快な砂利の音がする。

耳のとても奥で。

砂利を両手でこするようなその音が次第に変化し始める。

僕はいとおしくもなんともしない彼女の体を抱いてみる。

僕は勃起をする。

彼女はそこで初めて彼女の形を取り戻す。

僕は思う。今目覚めるべきじゃなかったんだ、と。

そう、さっきのキスの段階で彼女は目覚めるべきだったんだ。

今は少し間が悪い。

僕は勃起するペニスを彼女に気づかれないよう、そっと隠そうとする。

でももう遅い。

彼女は知ってしまったている。

彼女は微笑を浮かべている。

砂のキャンバスに枯れた木の枝で描いたような笑みだ。

愛してるわけじゃないんだ。

と僕は弁明する。

私も愛してないわよ。

と彼女はその微笑を湛えたまま僕に言う。

そうだろうと思ってたんだ。
ずっと。

彼女は僕の事なんか愛してない。
でもそんなのはどうでもいい問題だ。

問題は、僕が彼女を愛していない事でも、
彼女が僕を愛していない事でもない。

ましてや僕のペニスが勃起し続けている事でもない。

僕はあそこでなんでグレイプフルーツジュースなんて買ってしまったんだろう。

あんなの間違えるわけ無いじゃないか。
いくら隣にあったからって。

僕はオレンジジュースを買うべきだった

僕たちは性交をする。

勃起こそしているけれど、興奮はしていない。

僕はいたってシンプルに冷静だ。

それはただの交わり。

ただ、無目的に、当たり前のこととして体を重ねるだけの行為。
僕は彼女が砂だった事を思い出す。

彼女が砂だろうが、もう今更どうでもいいことだ。

僕は必死に腰を動かす。

でも射精までは程遠い。

僕に「射精」なんて機能が備わっているんだろうか？

と自分のペニスに問いかけて見るが、

こいつはただ誇らしげに、少し恥ずかしげにいきり立っているだけだ。

僕は目覚める。

夢精はしていない。

少しだけほっとする。

夢精をしていない事にじゃない。

彼女がそこにいないことに、だ。

僕はベッドから起き上がり、

リーヴァイスのデニムとくたびれた茶色のYシャツを身に着けて家を出る。

自動販売機を探す。

僕は自動販売機をここ数年利用した事が無かったので、自動販売機がどこにあるのか検討もつかない。

でもそれはうちからすぐ近くにあった。

コカコーラ社製のベンダー。

大丈夫、4mもありはしない。

きちんと、普通の自動販売機だ。

値段だって260円もしない。

普通の値段だ。

そこで僕はふと奇妙な感覚に襲われる。

グレープフルーツジュースのとなりにオレンジジュース。

いや、落ち着こう。

普通に考えてグレープフルーツジュースの隣にオレンジジュースがあることなんて、

別におかしな話でもないじゃないか。

当たり前のことだ。

でも嫌な耳鳴りがやまない。

その音に意識を集中する。

砂の音だ。

砂利をこする音。

誰かが僕に言う。

さあ、今度はオレンジジュースのボタンを押すんだ。
間違えないようにね。

そうだ、もうミスをするわけにはいかない。

僕はお金を入れ、オレンジジュースのボタンを押す。

そして少しほっとする。

僕だって毎度毎度ミスをするわけじゃない。

大丈夫。

そして出てきた缶を取り出す。

グレープフルーツジュース。

そう、あの時のあのグレープフルーツジュース。

砂の塊が後ろでおかしそうに笑っている。

僕の理性がその瞬間に飛んでしまう。

砂の塊を必死で蹴りとばす。

うまく蹴れなくて、僕はとてもいらいらする。

何度も何度も蹴る。

僕は自分が蹴り飛ばしていたものがただの猫だった事にきづく。

新聞配達の時、配達先にいるいつもの猫だ。

猫はぐったりしている。

きつともう助からない。

「君は性行為をしたね」

と誰かが言う。

「性行為をしたら子供が生まれる。

子供が生まれれば時代が今より一つ先へ進む。

時代が先に進むと今より速く走る車が開発される。

そして今より速く走る車が開発されると今より多くの猫が轢き殺される。

君が猫を殺したんだ」

それに対して」が言う。

「それは物事の暗い側面だよ。

君は悲観的なものの見方をしすぎる」

誰かがそれに答える。

「そう、それは暗い側面。

一方では、進化した世界で誰かが誰かを愛し、性行為をし、幸せな世界が広がっている。

でもね、同時進行的に、多くの猫も轢き殺されている。

誰かが性交をしているその最中にそのベッドの下で猫がミンチになっ
てるんだ。

なんか、愉快的な光景だね」

僕は恥ずかしくなって憤慨する。

「だからセックスをするなっていうの？

僕のした事が間違ってるって言うの？」

彼は言う。

「そうじゃない。

君の行為は一つも間違っちゃいない。

僕がしているのは、セックス自体の話じゃないんだよ。

ゴムをきちんと使えよ、っていうことだ。

たとえ、相手が砂の人形でもね」

そんなこと彼に言われなくなつて分かつてる。
でもあの時は仕方が無かつたんだ。

「そう、仕方が無かつた。

でも猫は死んだ。

そう、仕方が無かつたんだね。

猫が死ぬと」が泣く。

彼は猫を本当に大事にしていたからね。

君は」に謝らなければね」

「ごめんなさい」

すると」は言う。

「大丈夫、わたしは猫を愛してるけれど、鼠も愛してるんだ。
だから大丈夫。

あんたが気に揉むことはひとつも無いんだよ」

僕は心から安心する。

安心した僕は席を立つと

横に座っている彼女の手を取る。

僕たちは並んで店の出口に向かう。

くれぐれも、コンドームを使う事を忘れないように。

と、彼がいう。

僕はつないでいる手じゃない方の手を軽くあげてそれに答える。

街は相変わらず夕焼けだ。

僕は砂人形の手を握り、幸せな気持ちだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0507b/>

僕は夢を見る。とても素敵な夢だ。

2011年1月8日14時51分発行